

コンピテンシー・ベースにおける保健で伸ばすべき資質・能力とは

－10年の歩みを振り返って－

保健体育科 佐藤 健太

高等学校新学習指導要領施行と時を同じくして、2022年度よりお茶の水女子大学ではコンピテンシー育成開発研究所（以下、ICD）が新設された。私自身、ICD 連携研究員を拝命したこともあり、大学を挙げたコンピテンシーを柱とする研究推進に携わることになった。本論では私が実践してきたこれまでの10年間の保健授業を振り返るとともに、新学習指導要領における健康教育とコンピテンシー・ベースでの資質・能力の育成との関連について考察する。

〈キーワード〉 保健 新学習指導要領 コンピテンシー 資質・能力 ICD

1. はじめに

本校に着任し、早いもので10年が過ぎた。この10年を振り返って、保健教育における大きな出来事といえば、中学校における保健未履修問題（2016年）、新型コロナウイルス感染症（以下、*covid-19*）のパンデミック（2019年～）、そして2022年度からの高等学校新学習指導要領の施行等が挙げられよう。特に、*covid-19*は世界中で猛威を奮い、これまで人々に甚大な影響を及ぼしてきた。2020年から少なくとも、自身だけでなく家族や大切な人の命、お互いの健康・安全を守るために、我々の生活様式や価値観は激変した。これまでになく健康管理や健康行動がフォーカスされ、人々の意識が高まり、自身や他者の健康のために実生活で自己防衛や感染防止対策といった様々な取り組みをしてきたといっても過言ではない。

さて、この10年間で私が担当してきた保健の授業は主に『現代社会と健康（1年生分野）』であるが、女子校という特性を踏まえ、どのような授業実践や指導方法が望ましいか、また生徒が保健の授業に求めるものは何なのか、保健学習を通じてどのような力を身につけさせるべきかといったことを考えながら、自分なりに創意工夫と試行錯誤を重ねてきた。ところが、生徒にとって保健の授業は週に1時間しかなく、受験科目でもない。健康といっても、まだ十代と若いゆえに不健康で困ったり、苦労したりした経験が少なく、あまり自分事・現実問題として捉えにくい。一方で、定期健康診断や体力テストの結果を見ると、やせ傾向・低視力・運動習慣の欠如・体力低下といった生徒が毎年浮き彫りになるほか、生徒へのアンケート結果から彼女たちの抱える健康課題・生活習慣の問題は深刻とはいかないまでも多様化していることが明らかとなる。これらは、生徒が自身の健康問題を自覚していない、自覚していても問題視していない、改善する時間がないといったケースが想像される。高校生である今は顕在化していない健康課題であるものの、潜在的な問題であることには違いない。このような状況から、授業を通じて生徒が自分のカラダと向き合い、将来を見据えて毎日の過ごし方に意識を向ける健康教育について、あらためて考え直す余地があるものと実感している。

先に述べたように保健は受験科目ではないものの、自らの健康について考え、理解するために必要不可欠な科目である。また、本校では医歯薬学系、保健・衛生系の進路を選択する生徒が一定数おり、卒業後に保健の授業で学習した知識・技能が活用される場面も大いにあるだろう。加えて本校は2019年度より、SSH（スーパー・サイエンス・ハイスクール）の研究指定校となり、科学的な視点から保健を考えさせたり、データや情報を活用したりする学習を積極的に取り入れてきた。私自身、保健の他に生命科学領域を扱う2年次の

課題研究の授業を担当し、保健授業との接点や接続性を考えながら実践を重ねてきた。しかし、単に知識や技能を持ち合わせているだけでは健康的な生活を送り続けることはできない。知識や技能を自分の生活に取り入れたり、活用したり、他者に伝えたり、広めたりすることで自らの健康、周囲の健康、ひいては社会の健康を保持増進していく姿勢が求められる。さらに、そこには今年度から施行された新学習指導要領で扱われる資質・能力の3観点の育成・向上がねらいとされる。これまで、私自身が授業実践を行う上でテーマとしてきた「実生活に活かす健康教育」が今後の生徒の伸ばすべき資質・能力とどのように結びつけられるだろうか。

本論ではこれまでの自身の10年にわたる保健授業の実践を振り返るとともに、新学習指導要領における健康教育（特に「現代社会と健康」領域）とコンピテンシー・ベースでの資質・能力の育成との関連について考察してみたい。

2. 新学習指導要領改訂のポイント

ここからは新学習指導要領の改訂におけるポイントについて確認したい。まず、科目保健における目標について、以下に示す。

保健の見方・考え方を働かせ、合理的、計画的な解決に向けた学習過程を通して、生涯を通じて人々が自らの健康や環境を適切に管理し、改善していくための資質・能力を次のとおり育成する。

- (1) 個人及び社会生活における健康・安全について理解を深めるとともに、技能を身に付けるようにする。
- (2) 健康についての自他や社会の課題を発見し、合理的、計画的な解決に向けて思考し判断するとともに、目的や状況に応じて他者に伝える力を養う。
- (3) 生涯を通じて自他の健康の保持増進やそれを支える環境づくりを目指し、明るく豊かで活力ある生活を営む態度を養う。

特に、今回の改訂で随所に登場する「保健の見方・考え方を働かせ、～（以下略）。」という文言について、“見方・考え方”は以下のように明記されている。

保健の見方・考え方については、疾病や傷害を防止するとともに、生活の質や生きがいを重視した健康に関する観点を踏まえ、「個人及び社会生活における課題や情報を、健康や安全に関する原則や概念に着目して捉え、疾病等のリスクの軽減や生活の質の向上、健康を支える環境づくりと関連付けること」であると考えられる。

新学習指導要領改訂のポイントについて以下に列挙してみると、“資質・能力”の3観点のほか、“健康課題の解決”，“体育との関連”，“見方・考え方”，“系統性のある指導”，“心肺蘇生法・応急手当の技能及びがん教育”などの充実といった文言・内容が新たに追加・強調されているのが見てとれよう。

○「保健」においては、生涯にわたって健康を保持増進する資質・能力を育成することができるよう、「知識及び技能」，「思考力，判断力，表現力等」，「学びに向かう力，人間性等」に対応した目標，内容に改善すること。

○ 個人及び社会生活における健康課題を解決することを重視する観点から、現代的な健康課題の解決に関わる内容，ライフステージにおける健康の保持増進や回復に関わる内容，人々の健康を支える環境づくりに関する内容及び心肺蘇生法等の応急手当の技能に関する内容等を充実すること。

○「体育」と一層の関連を図る観点から、心身の健康の保持増進や回復とスポーツとの関連等の内容等について改善すること。

○ 生涯にわたって健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを継続する観点から、「体育」と「保健」の

一層の関連を図った指導等の改善を図ること。

○「保健」の内容

個人及び社会生活における健康・安全に関する理解を通して健康についての総合的な認識を深め、保健の見方・考え方を働かせ、生涯を通じて自他や社会の健康に関する課題を解決していくための資質や能力の育成を図ることに重点を置き、小学校、中学校の内容を踏まえた系統性のある指導ができるよう改訂を行った。

また、指導に当たっては、心と体を一体的に捉えるとともに、「保健」と「体育」の内容を密接に関連付けて取り扱うよう配慮するものとした。

○ 内容の構成

個人及び社会生活における健康課題を解決することを重視する観点から、従前の「現代社会と健康」、「生涯を通じる健康」及び「社会生活と健康」の3項目を「現代社会と健康」、「安全な社会生活」、「生涯を通じる健康」及び「健康を支える環境づくり」の4項目とした。内容については、個人及び社会生活に関する事項を正しく理解し、思考・判断・表現できるようにするため、他教科及び小学校、中学校の内容との関連を考慮して高等学校における基礎的事項を明確にした。

○ 現代社会と健康

我が国の疾病構造や社会の変化に対応して、健康課題や健康の考え方が変化するとともに、様々な健康への対策、健康増進の在り方が求められていることを踏まえて、現代における健康課題とその予防及び対策について内容を整理し充実した。

その際、国民の健康課題や健康の考え方を充実して示すとともに、現代の感染症とその予防、生活習慣病などの予防と回復、喫煙、飲酒、薬物乱用と健康について項目を立てて充実することとした。特に生活習慣病などの予防と回復にがんを取り上げるとともに、精神と健康の内容を改善し、精神疾患の予防と回復の内容を新しく示し、より現代における健康課題に対応することとした。

なお、従前示されていた交通安全と応急手当については、新しい内容のまとめである「安全な社会生活」に移動することとした。 *一部領域は割愛

3. 本校の保健カリキュラムと指導方針

本校の保健の授業は1,2年次に1単位ずつ行われる。私の着任時（2013年度）からそれまで2,3年次に履修していたものが、前指導要領施行に合わせて1,2年次の履修に移行することになった（2013,2014年度は移行期間）。保健の授業は保健体育科専任教員2名に養護教諭を加えた3名でローテーションをしながら担当している。養護教諭が保健室を空けて保健の授業を受け持つことは他校では珍しいかもしれないが、専門的な立場・知識のある指導者による健康教育は非常に効果的であるとともに、養護教諭にとっても授業で定期的に生徒と顔を合わせることは生徒理解の上においても有益といえよう。

指導内容については、女子校という特性を踏まえ、生徒が自身の健康に興味関心をもち自身のカラダと向き合うこと、女子特有の発育・発達特性や健康課題の特徴について理解し、将来の健康を見据えて運動・食事・休養をはじめとする望ましい生活習慣のあり方等を科目体育と絡めて体得・習得できるよう考慮している。したがって、教科書を越えた内容やタイムリーな時事ニュースなども適宜取り扱っている。また、詳細は後述するが、SSHとして科学的思考力を育むべく、教科のSSH化も推進していることを付記しておく。さらに、冒頭にも述べたように、今年度より本学ではICDが新設され、コンピテンシーを柱とした教育活動の

実践に乗り出すこととなった。まずは、これまでの取り組みや成果を踏まえつつ、新学習指導要領における健康教育について、年度当初に年間授業計画を作成した（図1）。ただ、この段階ではコンピテンシーの定義や内容について、ICD から具体的な情報が下りてきていなかったため、コンピテンシー・ベースでの資質・能力の育成や評価といった観点は授業計画上に反映されていないことを断っておく。

2022年度 年間授業計画表									
学年	教科	科目名	単位数	使用教科書・副教材	必修・選択	講座数	生徒数	担当者	
1	保健体育	保健	1	大修館701 現代高等保健体育 大修館 図説現代高等保健 改訂版	必修	3(クラス)	120	丸山 実花、佐藤 健太	
科目の目標 ・健康の保持増進を図るために必要な基礎的・基本的な知識を理解するとともに、自らの健康問題を主体的に追究していくヘルスリテラシーを身につけようとする。 ・多様に変化する健康課題をはじめ個々のライフスタイルやライフステージに応じて、望ましい行動の自己選択・自己決定が行える能力を養おうとする。									
評価の観点の趣旨 知識・技能 ・学習内容を正しく理解できているか。 ・学習内容を正しく実践することができているか。 思考・判断・表現 ・学習内容をさらに掘り下げて調べたり、深く考えたり、工夫・発展することができているか。 ・学習内容を自分の言葉で言ったり、書き出したり、まとめたりすることができているか。 ・学習内容を他者と共有したり、比較したりすることができているか。 主体的に学習に取り組む態度 ・学習に意欲的に取り組もうとしているか。 ・学習した内容を積極的に実生活に取り入れたい、取り組んだりしようとしているか。									
学期	単元	学習内容(内容のまとまり)	目標(ねらい)	観点別評価規準	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度	評価の方法	評価の観点
1	4	体のつくりとはたらき(SSH対応) 健康のとらえ方	・人間の身体構造、身体メカニズムについて理解できるようにする。	・人間の身体構造、身体メカニズムについて理解している。	・人間の身体構造、身体メカニズムについて理解している。	・人間の身体構造、身体メカニズムについて考えたり、書き出したりしている。	・人間の身体構造、身体メカニズムについて、すでに知ろうとしている。		
		健康と意志決定・行動選択 健康に関する環境づくり 生活習慣病・がんとその予防	・健康についての概念を学び、自身の生活行動や自身を取り巻く健康環境を振り返って理解を深められるようにする。 ・生活習慣病やがんの多くは、日頃のライフスタイルが要因で罹患することを知り、健康的な生活を送る必要性について考えようとする。	・健康についての概念や生活習慣病、がんのしくみについて理解している。 ・よりよい食事、運動、休養・睡眠の方法について理解している。	・自身の生活習慣や生活行動を振り返って、改善のための工夫や方法を考えたり、話し合ったりしている。	・健康についての概念を主体的に学び、自身の生活行動や自身を取り巻く健康環境を調べようとしている。	観察 スピーチ15名	〇態 〇思	
		食事と健康 運動と健康 休養・睡眠と健康				・よりよい生活習慣を考え、日常生活の中で実践しようとしている。	スクラップノート 期末テスト	〇態 〇知・思	
2	7	喫煙と健康 飲酒と健康	・個人の生活行動と健康とのかわりについて理解を深めようとする。	・嗜好品や薬物が人間の体に及ぼす影響について理解している。	・個人の生活行動と健康とのかわりについて、具体的な方法を考えたり、取り組んだりしている。	・自らの健康課題に着目し、課題解決に向けて、前向きに取り組もうとしている。		夏休み課題レポート	〇知・思・態
		薬物乱用と健康 現代の感染症 感染症の予防	・嗜好品や薬物が及ぼす影響について理解しようとする。	・感染症やエイズ、性感染症について、これまでの歴史と現代の感染症の問題点及びその予防について理解している。	・自身の健康行動について、取り組んだことをレポートにまとめたり、発表したりしている。	・感染症やエイズ、性感染症について、これまでの歴史と現代の感染症の問題点及びその予防法を自身の生活に活かそうとしている。	観察	〇態	
		性感染症・エイズとその予防 欲求と適応機制	・感染症やエイズ、性感染症について、これまでの歴史と現代の感染症の問題点及びその予防法を知り、自身の生活に活かそうとする。	・心身相関及び精神の健康について、理解している。	・心身の健康の保持増進やストレスへの対処方法等について、具体的な方法を検討したり、話し合ったりしている。	・心の健康の保持増進やストレスへの対処方法等について、具体的な方法を検討しようとしている。	レポート発表会	〇思	
		心身の相関とストレス ストレスへの対処 心の健康と自己実現	・心身相関及び精神の健康についての学習を通して、心身ともに健康な生活を実践する能力と態度を培おうとする。	・心身の健康の保持増進やストレスへの対処方法等について、具体的な方法を検討したり、話し合ったりしている。	・心の健康の保持増進やストレスへの対処方法等について、具体的な方法を検討しようとしている。	スクラップノート 期末テスト	〇態 〇知・思		
		交通事故の現状と要因 交通社会における運転者の資質と責任 安全な交通社会づくり	・交通事故及び応急手当、心肺蘇生法についての知識を深め、実践できる能力を身につけようとする。	・交通事故の要因や運転者の責任、安全な交通社会に必要な条件等について理解している。	・各自、選んだテーマについて、調べたり、レポートにまとめたりしている。	・意欲的にレポート課題に取り組んだり、グループで協力して発表に取り組もうとしている。	グループ発表、実技 冬休み課題レポート・記録ノート・評価シート等	〇知・技・思 〇知・思	
3	2	応急手当の意義とその基本 心肺蘇生法 日常的な応急手当	・グループを編成し、自分たちで選んだテーマに沿って、調べ学習を行い、プレゼンの内容・方法を工夫し、分かりやすく発表を行おうとする。	・応急手当や心肺蘇生法の方法について、正しく理解し、実践している。	・レポートを持ち寄り、グループで聞き手に伝わりやすく、工夫して発表している。	・応急手当、心肺蘇生について、正しい方法を身につけようとしている。	観察 期末テスト	〇態 〇知・思	

図1 2022年度 保健年間授業計画表

4. “実生活に活かす健康教育”に向けた取り組み例

WHOは『health promotion glossary』として、「健康を保持増進するように、情報を得て、理解し、利用するための動機づけと能力を決定する認知的・社会的スキル」と定義し、ヘルスプロモーションを認知面、社会性を含めた広義の概念であると示した。また、学習指導要領では主体的・対話的で深い学びが推進されていることから、私は「ヘルスリテラシーの育成」「実生活に活かす健康教育」を柱に、これまで次のような本校独自の取り組みや実践を行ってきた。その内容を簡単に紹介する。

4.1. ヘルススピーチ

ヘルスピーチとは授業の冒頭に自身が興味・関心のある保健・健康に関連する話題や情報、日常的に取り組んでいることなどを2分間のスピーチにまとめ紹介するものである。1回の授業で2名ずつ順番にスピ

一チを披露し、年間を通じて全員が発表を行う。授業者はスピーチの内容について、補足説明を加えたり、授業内容に関連する内容であれば紐付けたりしている。留意点として、附属中からの内部進学の子はこれまで発表・プレゼンや対話的な学習の機会が多く、ある程度スピーチ慣れした生徒が多いが、一般入学（特に公立中出身）の子はそういった経験が少ない生徒もおり、まず年度初めにスピーチのルールと技術を指導している。原稿に沿って単に話すだけでなく、資料や具体物を提示したり、身振り手振りを使ったり、どうすれば2分間という短い尺の中で聴衆が分かりやすく、説得力のあるスピーチになるかを各自工夫するよう伝えている。また、聴衆側もただ話を聴くだけでなく、どんな観点でスピーカーを評価すればよいかを明示し、参考になるものは積極的に取り入れたり、実践してみたりする姿勢を心がけさせている。保健の学習もさることながら、言語能力やプレゼンテーションといった社会で必要な力を授業で育成したいといったねらいも含んでいる。

4.2. スクラップノート

スクラップノートは保健・健康にまつわる話題や情報が掲載された新聞記事・webニュースを1冊のノートに蓄積していくものである。保健や健康に関連する内容は多岐に渡り、その日の朝刊を眺めるだけでも複数の記事を拾うことができる。記事の選び方は様々な分野をまんべんなく集めてもよいし、医歯薬学部を目指す生徒であれば医療関連の記事、感染症に関心のある生徒は covid-19 やインフルエンザの記事、スポーツが好きな生徒はオリンピックやワールドカップ関連の記事といったように自身の興味・関心に応じて、チョイスする記事に偏りがあってもよいこととしている。しかし、この10年の間に新聞そのものを購読する家庭が年々減ってきたことから、本校の図書室や大学図書館を活用し記事をスマホで撮影したり、ネットニュースで見つかったりしたものをプリントアウトして、ノートに貼付する形式も可としている。また、新聞以外に雑誌や各種刊行誌などにも範囲を広げてよいこととしている。スクラップノートには単に記事を貼るだけでなく、その記事を読んだ自分の意見や感想を余白スペースに綴るまでがスクラップ作業となっている。スクラップノートのねらいとして、NIE (Newspaper in Education) の推進、最新の保健・健康情報にアンテナを張ること、得られた情報を取捨選択し自身ができそうなもの・興味のあるものを生活に取り入れようとする習慣づけなどが挙げられる。当初は全員に提出を促していたが、現在は生徒の多忙化や他教科の課題・提出物のバランスとの兼ね合いから、希望者による任意の提出課題としている。この課題は前任校から行っている取り組みであり、詳細については本校研究紀要第63号(2018年)を参照されたい。

4.3. 人体(カラダ)実験レポート

この課題も前任校から継続し、かれこれ20年弱の取り組みになる。人体実験レポートとは夏休み中に取り組みレポート課題で1学期に学習した既習事項を活用し、自分のカラダを使った実験を考え、3~4週間かけて実践し、その効果を検証するものである。本課題は保健と体育との関連性を意識しながら、自身のカラダに関する課題や不安、生活習慣の改善・解消を図ることを目的としている。実験前、実験中、実験後にはデータと画像をこまめに記録するようにさせ、カラダの変容を数値や視覚で分析・考察するようSSHと絡めて指導をしている。一夏かけて試行錯誤しながら頑張った成果をまとめたレポートは夏休み明けに生徒から提出され、これをもとに2学期の授業内で報告会を行っている。報告会ではクラス内で類似した実験テーマごとにグループで輪となって、自分のレポートを手で5分程度で紹介する。似たようなテーマ同士でも自分とは違った切り口、他者の工夫やアプローチを知ることによって新たな気づきや発見につながっている。そして実験内容について、グループ内でお互いに評価をし合い、評価の高かったレポートを代表生徒として、2学期末に学年全員を聴衆とした全体発表会を行っている。コロナ禍もあり、ここ数年は報告会や発表会が実施できない年もあったが、自分のカラダと向き合う重要な機会の1つとなっている。詳細については、本校研究紀要第60号(2014年)を参照されたい。

4.4. グループ発表

3学期は4～5人組を9～10グループ編成し、グループ単位で設定したテーマについて調査を行い、まとめたものを発表・共有する学習活動を行っている。先の人体実験レポートとともに、2年次の課題研究Iで取り組む探究活動の導入的な位置付けとしての役割も果たしている。ここでは、2学期の終盤からグルーピングやテーマ決めといった準備を進め、冬休みには個別に設定したテーマについて各自で下調べを行う。それを個人レポートにまとめ、冬休み明けに提出させている。冬休みや3学期初めの授業、昼休みや放課後を利用し、グループで集まって相談したり、レポートを持ち寄ってすり合わせをしたりして発表内容を構成していく。発表の方法については講義形式だけではなく、聴衆の好奇心をくすぐるようパワーポイント・劇仕立て・動画作成・手書き模造紙など工夫するよう指導している。こちらの取り組みも生徒同士で発表の相互評価をさせている。なお3学期は期末考査を実施せず、発表やレポート、提出物などによって評価を行っている。グループ発表では主体的・対話的で深い学びや言語能力の向上、ICT機器の活用に寄与するよう指導している。本実践もマイナーチェンジを重ねながら、前任校から行っているものとなる。

4.5. 外部講師の活用

外部から大学の先生や専門家・研究者を招いたり、卒業生を呼んだりして特別講義やゲストスピーカーとして授業に携わっていただくこともある。最近では、コロナ禍もあって実施できない時期があったり、オンライン対応となったりしているが、貴重なお話を伺うことができたり、授業者が変わることで非マンネリにもつながったりと、有益な機会となっている。特に、今年度から新たに加わったがん教育については、外部講師の積極的な活用が叫ばれており、有効な人材手配が求められよう。

4.6. 高大連携

4.5. 外部講師の活用とも関連するが、本校は大学と同一キャンパス内に校舎を構えており、本学の先生を招いて特別講義を実施したり、資料や情報の提供をいただいたり、授業の参観及び助言をいただいたりしている。加えて、本学教授陣で構成されるヒューマンライフイノベーション開発研究機構と筆者との共同執筆で刊行された『Q&Aシリーズ』副読本の全6冊（①生活習慣病「成人期」編、②生活習慣病「子ども期・高齢期」編、③炎症・感染症編、④発達障害「ASD」編、⑤発達障害「ADHD」編、⑥発達障害「LD、発達性協調運動障害、チック障害」編 2020年,2021年）は全生徒に無償提供してもらい、授業で活用させてもらっている。また、後述するが、大学の研究調査依頼への協力や共同研究の実施により、その成果を学会などで発表することも行っている。なお、本校は国立大学附属学校として教育実習生の受け入れを行っており、7月と9月に実習生が保健及び体育の授業を担当していることも連携の一端として付け加えておきたい。

4.7. SSH との関連

先述のように、本校はSSHの研究指定を受けている。今年度で1期4年目を終え、科目のSSH化も段階的に進めてきた。保健においては、女子校の特性を配慮した生理学（代謝・内分泌・出産・性周期・栄養・骨格や筋肉、筋運動など）を取り扱っているほか、先の人体実験レポートについてはより科学的な見地から効果的な実験内容・方法を各自実践することにも取り組んでいる。今後は理科（生物）・家庭科・公民科と関連する領域や内容のまとまりでの連携（人体のしくみ、発育・発達、欲求と適応機制など）、数学科・情報科とデータ分析や統計処理の分野での協力依頼といった他教科・他科目との横断的な活動も検討されよう。

4.8. 先進的・試行的な取り組み

先進的・試行的な取り組みもこれまでに複数取り組んでいる。がん教育は新学習指導要領施行前から文教大学の山本浩二准教授と継続的に共同研究を行い、同大学研究紀要にて「ヘルスリテラシーの構造に基づくがん教育の研究：中学校・高等学校における授業評価（2018年）」を執筆したほか、本学ホームページにある附属学校園教材・論文データベース内に『Q&Aシリーズ』副読本を活用した「自他の健康に根ざすがん教

育（2021年）」の実践を報告した。詳細については、web上に公開されている教材・論文データベースよりアクセスいただきたい。

また、4.6. 高大連携の取り組みとも関連するが、科研費助成事業の一貫で本学の大森美香教授と「インフルエンザ予防接種行動におけるフレーミング効果の検討（2020年）」について共同研究を実施し、日本心理学会第85回大会ポスター発表（2021年）に携わったほか、本学大学院の佐々木元子教授の「中等教育における「ヒトの遺伝」モデル授業の評価研究（2020年）」の研究調査に協力するなど、多様な実践を通し、その効果・成果を発信・普及している。

5. 資質・能力3観点とコンピテンシーの関連性

ご承知の通り、新学習指導要領の施行にともない、高等学校においても観点別評価が導入され、生徒に身につけさせる資質・能力として、新たに「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の3観点が掲げられた。各観点の詳細については、文科省主催の指導主事会や教科連絡会において、行政説明や情報共有がなされているため、ここでは割愛する。

加えて2022年9月、ICDよりコンピテンシーの内容と定義について、10の資質・能力の構成要素とその概要が各附属学校園に示された（図2）。ICDによると、以下の定義については大学生向けに作成されたものとのことで、対象となる児童・生徒の発達段階や教科教育の育成の観点を踏まえ、各附属学校園にて適宜解釈するよう申し添えられている。

これらを資質・能力3観点と比較してみると、ICDコンピテンシーの「批判的思考力」「創造的思考力」「省察的思考力」は“思考力”をより細分化・明確化したものと捉えることができ、「問題解決力」「対人的問題解決力（対人葛藤解決力）」は“判断力”をより具現化したもの、「協働性」「他者理解」「自己制御」「内的統制感」「エージェンシー」は“学びに向かう力、人間性等”や“表現力”に包含されると考えられる。ただ、上記はあくまでも筆者の主観的な捉え方であり、コンピテンシーについては、“総合知”とも言い換えられるため、必ずしも3観点のいずれかにあてはまるわけではなく、内容のまとまりや学習活動によって複数の観点にまたがるものもあれば、どの観点にも属さない独立した資質・能力として存在するものもあると考えられよう。

能力・資質	定義	備考
批判的思考力	「自分の意見や考えを、意識的に見直す力」を指しており、具体的には「自分の意見とは違う様々な意見を検討したり、意見に確かな根拠があるかを考えること」を意味します。	
協働性	「個人では得がたい成果をグループ全体で得るために、役割分担したり、助け合ったりする力」を意味します。	
創造的思考力	「新たな価値や優れた考えを生み出す力」を意味します。	
他者理解	「様々な他者の立場や考え方を推測したり、理解すること」を意味します。	
問題解決力	「実際に起きた問題で、解決の道筋が明らかでないものを改善・解決できる力」を意味します。	この能力は、学校での授業（各教科や課外活動等）における問題解決力育成などを通じて育まれるものと考えており、学校の授業でこれを直接育成することを想定したものではありません。
対人的問題解決力（対人葛藤解決力）	「他者との意見や価値観の対立を解決する力」を意味します。よりわかりやすくは、「他者とのトラブルを、お互いの立場を考慮して（win-winで）解決する」ことです。	
省察的思考力	「自らの活動を振り返って気づきを得る力」を意味します。	
自己制御	「望ましい目標を追求し、比較的望ましくない目標追求を抑制する力」を指します。よりわかりやすくは、「よいことをして、よくないことをしないようにする力」です。	
内的統制感	「自分自身の行動がある成果や結果をもたらすという期待」を指します。よりわかりやすくは、「自分でも頑張れば、様々な成果が得られるという感覚を持つこと」です。	「うまくいかないことがあっても、たいていは自分の努力でよくすることができると思う」などの項目で測定される感覚です
エージェンシー	「社会に変革を起こす力」を指しており、具体的には「社会の一員として、社会がより良くなるよう考え、行動していくこと」を意味します。	

図2 コンピテンシーの内容と定義
（お茶の水女子大学コンピテンシー育成開発研究所作成）

6. コンピテンシーとは何か

6.1. OECD の唱えるキー・コンピテンシー

2016年12月に中教審より示された答申の補足資料をいくつか紹介する。以下はコンピテンシー・ベースでの資質・能力、学力の概念や枠組みについて示されたものである。

OECDキーコンピテンシーについて

OECDにおいて、単なる知識や技能ではなく、人が特定の状況の中で技能や態度を含む心理社会的な資源を引き出し、動員して、より複雑な需要に応じる能力とされる概念。

【キー・コンピテンシーの3つのカテゴリー】

1. 社会・文化的、技術的ツールを相互作用的に活用する能力

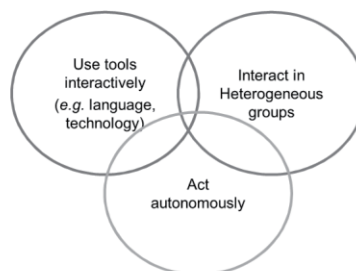
- A 言語、シンボル、テキストを相互作用的に活用する能力
- B 知識や情報を相互作用的に活用する能力
- C テクノロジーを相互作用的に活用する能力

2. 多様な社会グループにおける人間関係形成能力

- A 他人と円滑に人間関係を構築する能力
- B 協調する能力
- C 利害の対立を御し、解決する能力

3. 自律的に行動する能力

- A 大局的に行動する能力
- B 人生設計や個人の計画を作り実行する能力
- C 権利、利害、責任、限界、ニーズを表明する能力



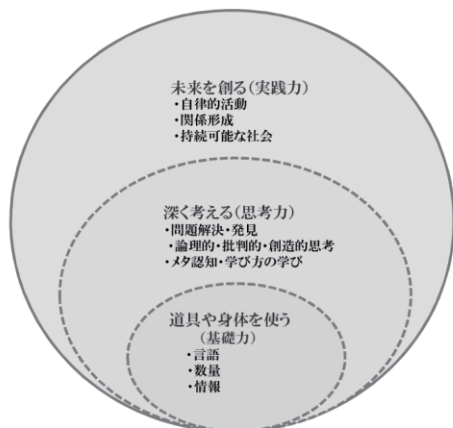
- この3つのキー・コンピテンシーの枠組みの中心にあるのは、個人が深く考え、行動することの必要性。深く考えることには、目前の状況に対して特定の定式や方法を反復継続的に当てはめることができる力だけでなく、変化に対応する力、経験から学ぶ力、批判的な立場で考え、行動する力が含まれる。

(出典) OECD “Definition and Selection of Competencies (DeSeCo)” を参考に文部科学省作成

図 3-1 OECD の唱えるキー・コンピテンシー

国立教育政策研究所が整理した資質・能力の構造化のイメージ

①思考力を中核とし、それを支える②基礎力と、使い方を方向づける③実践力の三層構造



求められる力	具体像 (イメージ)
未来を創る (実践力)	生活や社会、環境の中に問題を見だし、多様な他者と関係を築きながら答えを導き、自分の人生と社会を切り開いて、健やかで豊かな未来を創る力
深く考える (思考力)	一人一人が自分の考えを持って他者と対話し、考えを比較吟味して統合し、よりよい答えや知識を創り出す力、さらに次の問いを見つけ、学び続ける力
道具や身体を使う (基礎力)	言語や数量、情報などの記号や自らの身体を用いて、世界を理解し、表現する力

96

(国立教育政策研究所, 2013, p.26 一部編集)

図 3-2 国立教育政策研究所が唱える資質・能力の構造化

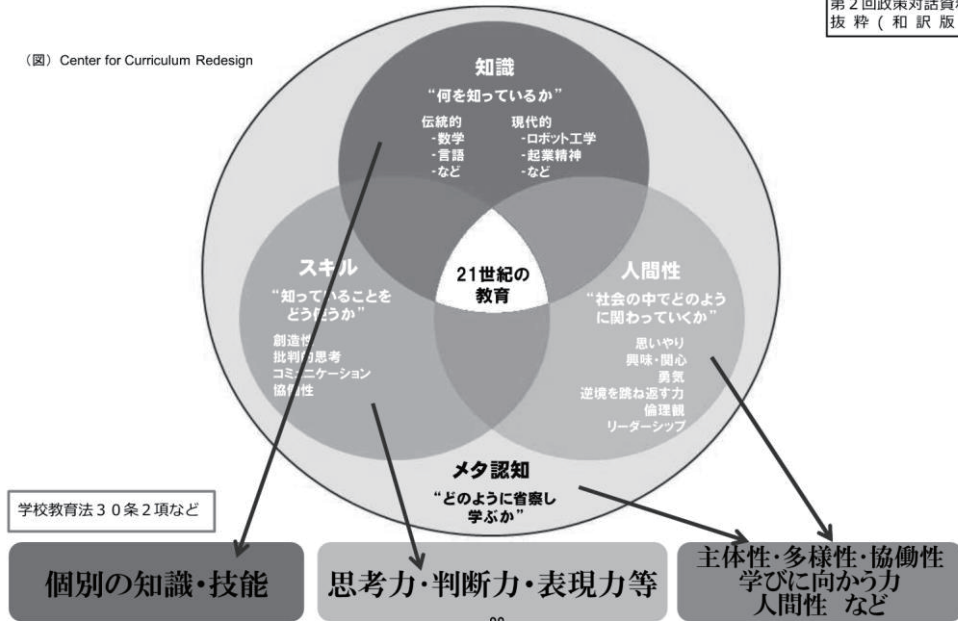


図 3-3 カリキュラム・デザインのための概念と学力の三要素の重なり

6.2. 岸学氏の講演より

さらに、コンピテンシーの概念がいつから形成され、これまでにどのような変遷を辿ってきたのか、本校第26回公開教育研究会（2022年11月19日開催）の講演会において、東京学芸大学次世代教育研究推進機構（以下 NGE、現在は閉所）の元機構長で東京学芸大学名誉教授の岸学氏をお招きし、ご教示いただいた。図 4-1 によると、OECD が 2000 年初頭にキー・コンピテンシーの概念を打ち出している。コンピテンシー自体は約 20 年前から存在し、学習指導要領もそれに応じてマイナーチェンジを行っているのが見てとれる。現在は Education2030 PhaseIIにあたる期間として、授業実践の検討・評価法開発・教師のコンピテンシー・カリキュラム開発・教員研修と養成の段階にある。NGE は 2015 年に設立され、2022 年 3 月に至るまで、多くの教育実践を行い、コンピテンシーの普及・推進に努めてきた。遅ればせながら本学にも ICD が設置され、大学や附属学校園が PhaseIIに取り組み、これからその開発内容や成果を広く発信しようという意図が汲み取れる。

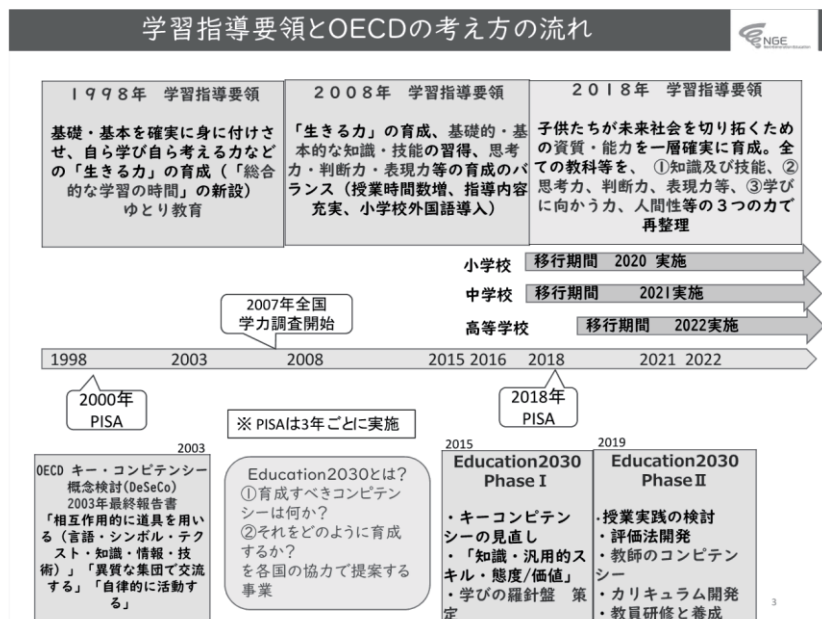


図 4-1 学習指導要領と OECD におけるコンピテンシーの変遷

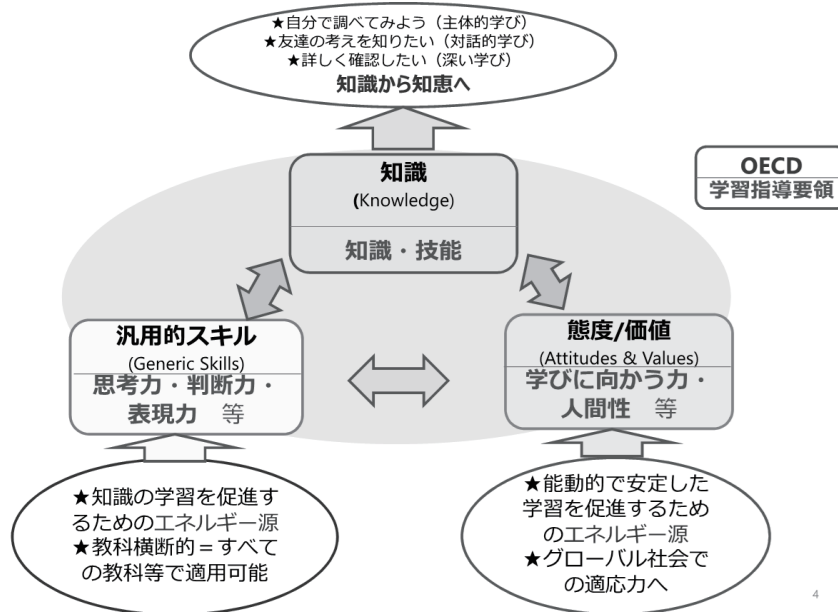


図 4-2 コンピテンシーの意味と相互関係

Competency(汎用的スキル、態度/価値)要素はどのようなものか？

*教科教育・教科専門教員への調査結果をもとにカテゴリー分類とその命名

汎用的スキル (7つ)	態度・価値 (8つ)
<ul style="list-style-type: none"> 批判的思考力 問題解決力 協働する力 伝える力 先を見通す力 感性・表現・創造の力 メタ認知力 	<ul style="list-style-type: none"> 愛する心 他者に対する受容・共感・敬意 協力しあう心 より良い社会への意識 好奇心・探究心 正しくあろうとする心 困難を乗り越える力 向上心

関口典裕・宮澤芳光 (2016) .「育成可能な資質・能力に関する調査」 「OECDとの共同による次世代対応型指導モデルの研究開発」 プロジェクト平成27年度研究活動報告書 15-25. より

図 4-3 コンピテンシーの要素とは

(図 4-1～3 は岸学氏より提供。一部抜粋したものを許諾を得て掲載)

また, NGE コンピテンシーは OECD と学習指導要領との相互関係として, 文科省の掲げた「知識及び技能」「思考力, 判断力, 表現力等」「学びに向かう力, 人間性等」の 3 観点にそれぞれ OECD の「知識」「汎用的スキル」「態度・価値」を対応させ, 得た知識を知恵へと昇華していくことが重要であるとしている (図 4-2)。さらに, 「汎用的スキル」には 7 つ, 「態度・価値」には 8 つの具体的な“要素”を資質・能力として明示しているのが特徴である (図 4-3)。

6.3. ICD コンピテンシーと NGE コンピテンシーの比較・整理

岸氏の講演を踏まえ、ICD コンピテンシーと NGE コンピテンシーを独自に比較・対応してみることとした(図 5)。個人的には ICD コンピテンシーは高等教育機関向け、NGE コンピテンシーは初等中等教育学校向けといった感覚で、NGE コンピテンシーの方がより細分化されている印象を受けた。また、NGE コンピテンシーのうち「先を見通す力」「愛する心」「好奇心・探究心」「向上心」については、ICD コンピテンシーに該当する要素がなく、関連のありそうなもの、類似しているものと対応させた(表内にはカッコ付きで記載)。筆者は以下のように整理してみたが、解釈や捉え方がズレているものもあることをお断りしておく。このように、ICD と NGE とで、コンピテンシーの分類や名称に多少の差異は見られるものの、育成すべき資質・能力の要素は概ね同じであることが理解できる。

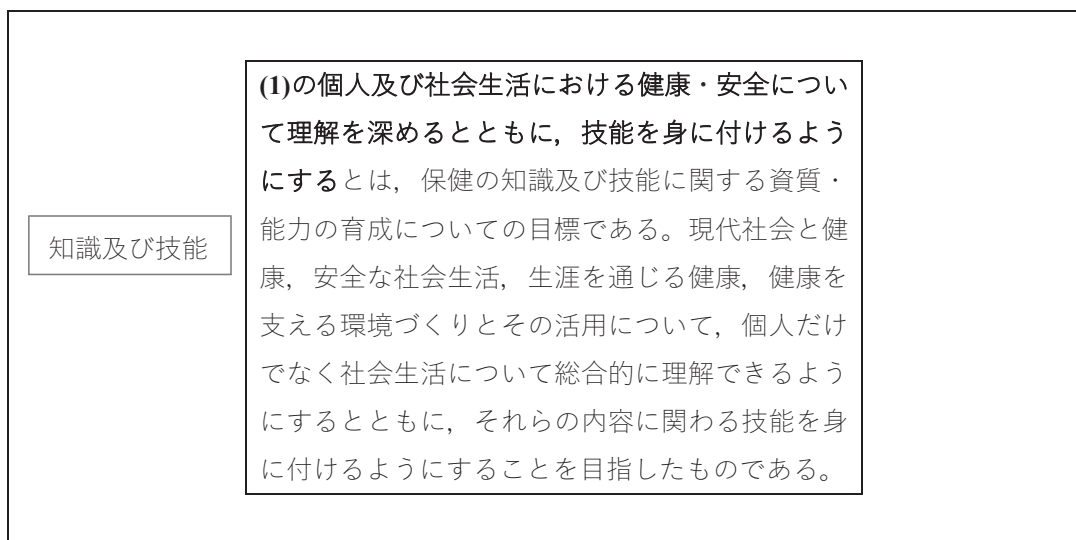
なお、岸氏は講演の中で「コンピテンシーの構成要素は何が正しいというものではなく、学校の実情や教育目標・教育方針に合わせて適宜変わるものである。さらに、コンピテンシーは教科横断型の学習や協働的な活動・取り組みによって育まれるものであり、これらの構成要素を活用するような授業づくりが大切である。」と述べていたことから、各校でコンピテンシーの構成要素を設定・見える化し、それに応じた教育実践を工夫・開発していくことが求められよう。

ICD コンピテンシー	NGE コンピテンシー	
	汎用的スキル (思考力, 判断力, 表現力)	態度・価値 (学びに向かう力, 人間性等)
A 批判的思考力	批判的思考力… A	愛する心 (… D)
B 協調性		他者に対する
C 創造的思考力	問題解決力… E F	受容・共感・敬意… D, F
D 他者理解	協働する力… B	協力しあう心… B, F
E 問題解決力		より良い社会への意識… J
F 対人的問題解決力 (対人葛藤解決力)	伝える力… B, F	好奇心・探究心 (… C)
G 省察的思考力	先を見通す力 (… I)	正しくあろうとする心… H
H 自己制御	感性・表現・創造の力… C	困難を乗り越える力… E
I 内的統制感		
J エージェンシー	メタ認知力… G, I	向上心 (… I)

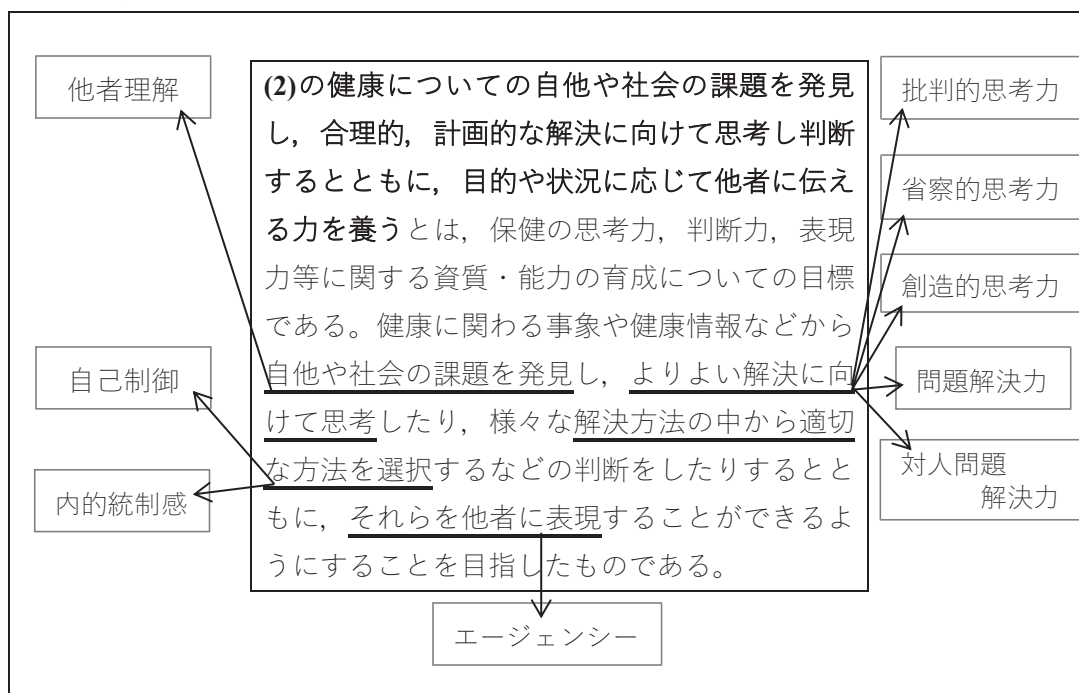
図 5 ICD コンピテンシーと NGE コンピテンシーの対応表 (2022 筆者作成)

7. 保健におけるコンピテンシー・ベースでの資質・能力とは

これを踏まえ、保健で育むべき資質・能力が ICD コンピテンシーのどの資質・能力と関連するか、冒頭に挙げた科目保健の目標の解説及び各段階で示した観点別の主な表記（学習指導要領解説内）をもとに、以下の通り分類した。なお、ICD コンピテンシーには知識及び技能に相当する資質・能力が存在しないため、(1)についてはそのまま知識及び技能と表記することとした。

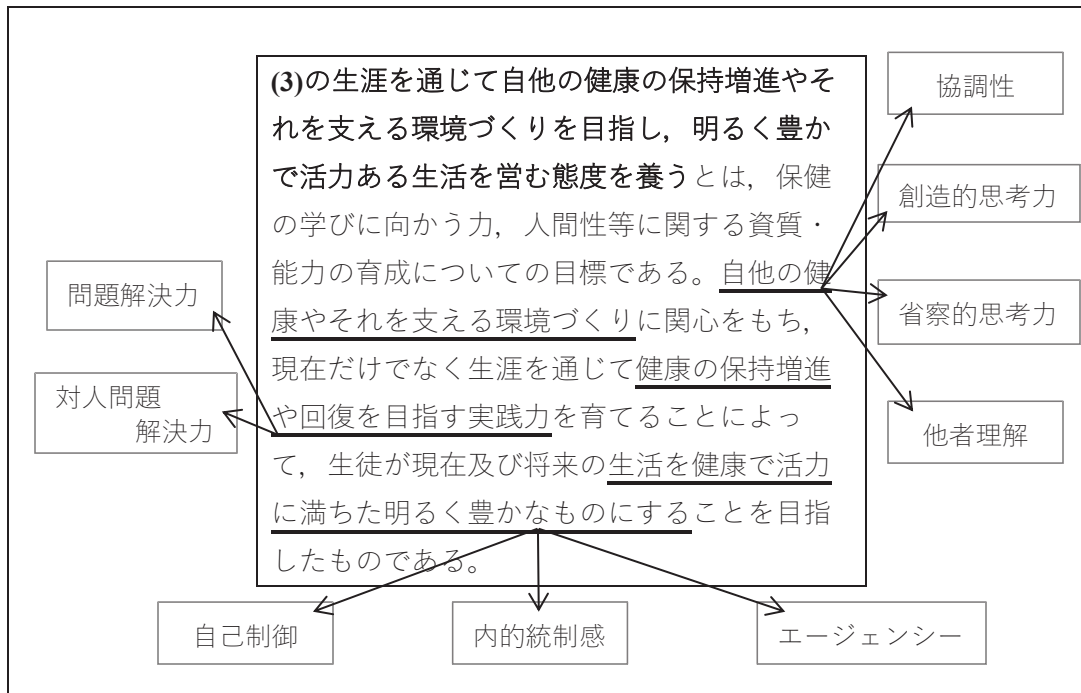


(2)については、「自他や社会の課題を発見」は他者理解、「よりよい解決に向けて思考」は批判的思考力、省察的思考力、創造的思考力、問題解決力、対人問題解決力、「解決方法の中から適切な方法を選択」は自己制御、内的統制感、「他者に表現」はエージェンシーにそれぞれ分類した。



(3)については、「自他の健康やそれを支える環境づくり」は協調性、創造的思考力、省察的思考力、他者理解、「健康の保持増進や回復を目指す実践力」は問題解決力、対人問題解決力、「生活を健康で活力に満ちた明るく豊かなものにする」は自己制御、内的統制感、エージェンシーにそれぞれ分類した。

これらのことから、保健におけるコンピテンシーにはすべての ICD コンピテンシーの資質・能力と知識及び技能が包含されており、複合的に関連していると考えてよいだろう。



8. 年間授業計画上におけるコンピテンシーの位置づけ

先に示した年間授業計画内で実践している保健の学習活動において、コンピテンシーがどのように位置付けられているかを整理してみたい(図6)。あくまでも筆者の独断で示したもので、同じ学習活動でも指導者・指導観によって構成要素に○が付くケース、付かないケースで意見が分かれることは予め断っておく。

図6について学習活動別に縦に見てみると、レポート課題や発表・プレゼンといった取り組みは様々なコンピテンシーの要素を育むことに結びつくと考えられる。一方で、資質・能力の構成要素別に横に見てみると、「批判的思考力」や「省察的思考力」は多くの学習活動で育むことができるものの、「協働性」、「対人問題解決力(対人葛藤解決力)」、「自己制御」、「エージェンシー」の向上につながる取り組みや機会は少ないことがわかる。このことから、上記の育みづらい資質・能力の要素については、図6に挙げた学習活動だけで

学習活動 構成要素	ヘルスピーチ	スクラップノート	人体実験レポート	レポート発表会	冬休み課題レポート	グループ発表	定期考査
批判的思考力	○	○		○	○	○	○
協働性						○	
創造的思考力			○		○	○	○
他者理解	○			○		○	
問題解決力			○		○	○	
対人的問題解決力 (対人葛藤解決力)						○	
省察的思考力	○	○	○	○	○	○	
自己制御			○	○			
内的統制感		○	○		○	○	○
エージェンシー		○					
(知識)	○		○	○	○	○	○

図6 保健の学習活動別コンピテンシーの位置付け

なく、普段の授業の中で意識させたり、指導者側による別の工夫や仕掛けを用意したりすることが求められよう。もちろん、保健だけですべての構成要素を育むことは困難であるため、「協働性」、「対人問題解決力（対人葛藤解決力）」などの生徒同士がかかわり合うことで育まれる資質・能力は実技科目である体育で重点的に取り扱うなど、住み分けを考えていくことも必要である。

9. 今後の課題と展望

「コンピテンシーは単一教科での育成が難しく、教科横断での指導による様々なアプローチから育成・統合していく必要がある」と岸氏は説いている。つまり、保健の実践だけでコンピテンシーを育成するのではなく、各教科・科目においても同様にコンピテンシーの視点を持ちながら、他教科・他科目同士での連携や情報交換を促進し、学校全体でコンピテンシー育成に向けての意識や方向性を醸成していくことが求められる。また、本校はSSHも走らせているため、保健教育における理系推進、課題研究、コンピテンシー育成の3つを今後どのように関連づけ、取り組んでいくかが検討課題として挙げられる。

さらには、コンピテンシーの真正な評価にあたってのルーブリックの作成・整備にも取り組んでいく必要があるだろう。岸氏によれば、ルーブリックについては“加算型ルーブリック”と“深めていくルーブリック”の2種類を検討することが望ましいとのことだった。これらについても、両者の内容や違いをよく把握・分析した上で、他校の事例や取り組みなどを参考にしながら、コンピテンシーの育成や到達の度合いを測る手法を検討するとともに、本校の教育方針に沿ったよりよい評価の形態を模索していきたいと考えている。

10. まとめ

私自身、不勉強なこともありコンピテンシーについて、恥ずかしながらこれまでまったくの無知であった。今回、ICDの連携研究員となったのを機にコンピテンシーについて知見を深めてきたつもりであるが、それでもまだ分からないことが多く、引き続き研鑽の必要性を強く感じている。同時に、お茶高での10年間の保健教育をコンピテンシー・ベースで振り返ることによって、これまでの自身の教育実践に手応えを掴みつつも、工夫やアプローチ次第で生徒の資質・能力をもっと引き出せるのではないかという思いにも駆られている。この先の実践が惰性とならず、常に客観視しながら知識や指導をアップデートしていくことで、コンピテンシーの育成に結びつけていきたいと考える。

この10年のうちに健康を取り巻く環境は大きなメタモルフォーゼを繰り返し、今後もその流れは加速するであろう。新学習指導要領の施行とともに始まった観点別評価は生徒一人一人をよく“見とる”とともに、自分自身の実践を見直し改善につなげることが謳われている。コンピテンシーの構成要素で言うところの「省察的思考力」、「批判的思考力」、「創造的思考力」を生徒だけでなく、指導者も向上させなければならないと自戒する次第である。今後も世の中の動向を察しながら、この先の10年、20年を視野に入れた系統性のあるコンピテンシーの育成について、引き続き検討を重ねていきたい。

<出典, 参考・引用文献・資料>

- 1) 「高等学校学習指導要領 保健体育編」文部科学省 2022年
- 2) 「高等学校学習指導要領解説 保健体育編」文部科学省 2022年
- 3) 「保健授業の挑戦」七木田文彦 2021年 大修館書店
- 4) 「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ 補足資料」文部科学省
https://www.mext.go.jp/content/1377021_4_2.pdf 2022年9月18日閲覧
- 5) 「コンピテンシー・ベースの資質・能力, 学力の概念や枠組み」中教審答申補足資料 2016年12月
- 6) 「新学習指導要領の改訂のポイントと学習評価(高等学校 保健体育科): オンライン研修教材」
文部科学省 https://www.nits.go.jp/materials/youryou/files/068_001.pdf 2022年9月18日閲覧
- 7) 「お茶の水女子大学 コンピテンシー育成開発研究所」
<https://www.cf.ocha.ac.jp/icd/j/menu/about/d010598.html> 2022年9月18日閲覧
- 8) 「お茶の水女子大学附属学校園 教材・論文データベース」
<https://kyozai-db.fz.ocha.ac.jp> 2022年9月18日閲覧
- 9) 「資質・能力(コンピテンシー)の育成のための授業研修の検討」雨宮沙織, 下島泰子
東京学芸大学次世代教育研究推進機構報告書 pp.117-118 2019年
- 10) 「自己の健康や生活習慣と向き合うきっかけに - 『人体実験レポート』の実践 -」佐藤健太
お茶の水女子大学附属高等学校研究紀要 第60号, pp.101-127 2014年6月
- 11) 「ヘルスリテラシーを育むNIE活用の可能性 - 『スクラップノート』作成を例に -」佐藤健太
お茶の水女子大学附属高等学校研究紀要 第63号, pp.133-143 2018年6月
- 12) 「e-ポートフォリオを活用した探究活動 - 生命・医療・衛生講座における取り組み -」佐藤健太,
毛内清香 2019年6月
- 13) 「ヘルスリテラシーの構造に基づくがん教育の研究: 中学校・高等学校における授業評価」
山本浩二, 谷百合香, 佐藤健太 文教大学教育学部研究紀要 第52巻 pp.251-266 2018年
- 14) 第19回がんばれ先生! 東京新聞教育賞「自己の健康や生活習慣と向き合うきっかけに - 『カラダ実験
レポート』の実践 -」2017年
- 15) 「第19回東京新聞教育賞 ~実生活から健康学ぶ~」東京新聞 2017年3月18日付朝刊
- 16) 体育科教育「【学習指導要領の改訂】保健と体育の関連を図る」『実生活を通して健康を学ぶ』
佐藤健太 pp.34~37 大修館書店 2017年8月号
- 17) 「インフルエンザ予防接種行動におけるフレーミング効果の検討」大森美香, 山崎洋子, 佐藤健太
お茶の水女子大学共同研究 2020年
- 18) 本校主催 第26回公開教育研究会 講演会「新学習指導要領で培うコンピテンシー」講師: 岸学氏
講演スライド 2022年11月

<参加研修会・学会・シンポジウム・発表・研究協力等（直近5年分）>

- 1) 文部科学省主催「がん教育研修会」 2018年6月
- 2) 第30回全附属研究大会 保健体育分科会発表「ヘルスリテラシーを育むNIE活用の可能性」
2018年10月
- 3) 文部科学省主催「全国学校保健・安全研究大会」 2019年11月
- 4) 文部科学省主催「高等学校各教科等担当指導主事連絡協議会」 2020年7月
- 5) 「中等教育における『ヒトの遺伝』モデル授業の評価研究」佐々木元子 お茶の水女子大学 研究調査協力
2020年11月
- 6) 「インフルエンザ予防接種行動におけるフレーミング効果の検討」大森美香, 山崎洋子, 佐藤健太
日本心理学会第85回大会ポスター発表 2021年9月
- 7) 文部科学省主催「高等学校各教科等教育課程研究協議会」 2021年11月
- 8) 「CancerX World Cancer Week 2022 教育セッション」シンポジウム 指定発言者
2022年1月
- 9) 「学校でのがん教育における『遺伝』～誤解なく「ヒトの遺伝・遺伝子」を伝えるために～
Joint meeting」指定発言者 日本遺伝カウンセリング学会遺伝教育啓発委員会主催
2022年3月
- 10) 文部科学省主催「令和3年度がん教育シンポジウム」 2022年2月
- 11) 文部科学省主催「がん教育研修会」 2022年8月
- 12) 本校主催 第26回公開教育研究会 講演会「新学習指導要領で培うコンピテンシー」 講師：岸学氏
2022年11月
- 13) 本学コンピテンシー育成開発研究所作成「アクティブ・ラーニング講座」動画視聴 全6回
2022年11月（学内関係者のみ閲覧可）